

団長ちゃんの行方が
分からなくなつて
一か月以上が経過し…

私はアウギユステ列島の
リゾート施設で
団長ちゃんの姿を見た
知らせを受け…

いても立ってもいられず
そのリゾート施設に
潜入することにした

女性、水着着用限定で
特別会員のみに
入れるという部屋…

表向きは普通の
施設だったのだけど…

立ち入り禁止の
通路の先…
そしてこの警備の数
間違いないわ
何かある…

団長ちゃんを
見たという
情報の場所に…

おそらく何かの薬品…
でも…っ!!

次第に体が…
お腹の下が…
熱くなつてきてる

奥から漂う
甘い香り…

この奥に
団長ちゃんが
いるかもしれない

その考えが
危険信号を
麻痺させた…
そして—



その中心に...

それらが交わった
嘔せ返るほどの
獣臭

(団長ちゃん)
彼女はいた



雄と雌...

汗と唾液

子種...



そこには...



「いいじゃねえか
マグロ女犯すより
抵抗して来た女を
ひん剥いていく方がよ」

「今となっては
薬でまともに動けずに
メスイキするだけの女だ」

「どうあがいても
俺たちに勝てねえよ」

「さっきまで新品だった
水着がもうボロボロに
なったじゃねえか」

「ちっとは加減しろよ」

「しょうがねえだろ
いきなり抵抗して
きたんだからよ」

目を疑うような
光景が広がっていた...

「オラ、赤ちゃんに
たっぷり栄養
くれてやる」

「受け取れや…!!」

「ところで、そんなに
激しく犯して中の胎児は
大丈夫なのか？」

赤…ちゃん…?

「大丈夫だろ」

何を…言っ…

「何せ、孕ん中に
いるのは魔物の
ガキだからな」

「以前こいつに逃げられた
スボンサー様が
大変お怒りでなあ」

「流れたガキの恨みに
研究中の魔物の種を
魔法で着床させたのよ」

「魔物の胎児は母体
の魔力を吸収して
育つらしいんだが」

「どうやら精液に
含まれる魔力も
吸収するんだとよ」

「魔物のガキか
なら遠慮はいらねえな！」

「そういうことだ」

「おい、もう一周
輪姦すぞ!!」

「マンコぶつ壊れる
くらいザーメン
喰わせてやれ」

そこで私の
何がキレた

自身の体の
異常すら忘れ…

怒りのまま
抜刀し…

飛び掛かった…

はずだった…のに…

「さすがドララ
すげえ締め付けた」

「もう出ちまい
そうだぜ!!」

「いやッ!
出さないでえッ!」

「いや、それだはッ!!」

「ださないでえッ」

「うるせえ!!
子袋にたつぷり
出してやる!!」

私は男たちに
犯されていた…

どうしてこんなことに
なってしまったのか…

答えは簡単だった…





「やっぱりあのジータって女を使うのは正解だな」

「こうやって餌ばら撒いてたら女の方から勝手に来てくれるんだからな」

「オラどうした!!
おつきまでの
威勢はよ!!!」

「く……っ
どう……して……」
気づいた時には体は鉛のように重くなっていた



「この施設に
充滿してる匂さ」

「まさか女にしか
効かない神経薬だと
思わなかったらうからなあ」

「そう……
施設に充滿していた
あの甘い匂い……」

へへ……たっぷり
出してやったぜ……

「ああ……また……
腔内に……」



私の操は……

「やめてっ!!
やめなさいっ!!!」

「じゃ、いただきまーす」

奪われた……



「回ほどにもねえ」

嘲笑われ……

「おい、新しい肉便器が
来たぞ、他の奴らも
呼んで来い!!!」



そして体が火照り
力がうまく出せ
なくなった私は

大した抵抗もできないまま
あっさりと敗北した……

「がはっ!!!」



「ホラオラどうした!? ドラフの姉ちゃん!!」

「このままじやまた 出されちまうぞ!!」

「あっああっ!! このっ くっ…卑怯…者おおっ…っ!!」

「ぐわんぐわんは、ぐわんぐわんは、ぐわんぐわんは、」

「あほか!! 畏にかかろ方が 悪いんだよ この雌ドラフが!!」

「必ず…っ…お前たちをつ たおして…っ あっああっ!!」

「下の回はもうでもねえみたさだぞ!!」

「俺のチンポを 涎出しながら 銜えてるじゃねえか?」

「俺のザーメンが そんなに欲しいのか?」

「違…っこれ…っはっ …ああっ!!」



「たっぷり受け取れや!」

灼熱のマグマの ように熱い子種が 私の無防備な 子宮内を焼いてくる…

どこの誰ともわからない 男の子種で孕まされる…

「へへっ… そんなにおねだりされちゃ 任方がねえ!!」

「いやー出さないでっ!!」

「これ以上出されたら 赤ちゃんがっ!!」

その恐怖に雌の悲鳴を あげるしかなかった